

パウロは体の復活を「種とそれによって実る実」の譬え(36～38 節)と「人間の肉と動物の肉、天上の体と地上の体」の譬え(40～41 節)を用いて、論証します。応答の要点は38 節です。パウロは、蒔かれた種が育ち、実を实らせることを単なる自然現象としてではなく、神さまの意志に基づく創造の業であることとして語っています。当時の人々にとっては、種が芽を出して成長し、種とは形も大きさも違う実が実っていく過程は、まことに不思議な神秘的なことであり、そこには神さまの大きな力が働いていると信じられたのです。私たちもこの体が死んだ後に、神さまによって今の体とは全く違う新しい体を与えられるのです。しかし、私たちは復活において別の人、私が私でなくなってしまうのではなく、私は私であり続けるのです。現代の言葉で言えば「アイデンティティ」は残るのです。39 節以下で、まず動物の「肉」にも違いがあることが取り上げられます。ここで「肉」というのは、「形を持った、目に見える体」の意味です。動物でも体をもって発現する生命形態にはさまざまな違いがあります。続いて、「また、天上の体と地上の体があります」と言って、体に違いがあることが、天上にまで広げられます。「天上の体」は分かりにくい表現ですが、当時の宇宙観では天体は光の衣を着ている生命体と考えられていました。それは太陽や月や星のことと思われまゝです。天上の体と地上の体ではその輝きが違っているし、天上の体の間、太陽と月と星とでは、また星と星の間にも輝きに違いがあるのです。神さまはそれぞれに様々な違った輝きを持った体を与えるのです。

しかし、これらの論証は現代人の私たちが期待する説明にはなっていないようにも思います。復活の後の世界は、私たちが想像しうる領域をはるかに超えているのです。パウロは、神さまによってしか、信仰によってしか分からないことを、自分の力と知恵によって分かろうとする人を「愚かな人だ。」と言ったのではないのでしょうか。そして、ここで忘れてならないのは、今の地上の歩みもまた、神さまが与えて下さったものであり、そこにも、ある輝きを与えられているということです。神さまが世の終わりに与えられる新しい、輝きに満ちた復活を待ち望むということは、同時に、私たちに今生きているこの体にそれぞれ輝きを、生きる意味を与えて下さり、私たちの存在を是認されているのです。イエスが山上の説教で言った言葉、「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である。」を思い起こします。既に、今、地の塩であり、世の光なのです。神さまが今与えて下さっているこの体に、輝きを見出すことなくして、復活の体の輝きを信じ待ち望むことはできないのです。